

シンガポール文学と日本人イメージ

和田 桂子

要旨

シンガポールと日本は今日、外交面でも経済面でも友好な関係を保っている。しかし文学においては、必ずしも緊密な関係があるわけではない。シンガポール文学は日本でよく知られているとはいえず、作品の中の日本人イメージについても検証されることが少なかった。

本稿では、シンガポール文学に見られる日本人イメージを概観し、1942 年から 1945 年に至る日本占領期の経験が、現在も大きな影を落としていることを例証する。J. G. ファレルの『シンガポール・グリップ』、佐々木譲の『昭南島に蘭ありや』のほか、リム・ティアンソー、ウォルター・ウーン、ゴパル・バラタム、ゴー・シンタブといったシンガポール作家たちの作品を取り上げ、その中に描かれる日本人のイメージを考察する。

シンガポールの文学界におけるユニークな試みは、「怪談」の出版であろう。ラッセル・リーの編集によるシンガポールの怪談シリーズは、毎年ベストセラー入りしている。このシリーズに頻出する要素のひとつが日本軍によるシンガポール陥落と、それに伴う人民の死である。

このような作品群によって日本人イメージは、ややステレオタイプ化されてしまった。こうした傾向を脱したとき、シンガポール文学はさらなる発展を遂げるだろう。

The Japanese Images in Singapore Literature

WADA Keiko

Abstract

Singapore and Japan today are both diplomatically and financially on good terms. In literary fields, however, such close relationships do not necessarily exist. Singapore Literature is not particularly well-known in Japan, and the Japanese images in Singapore Literature have not been surveyed in depth.

This paper attempts to give an overview of the Japanese images in Singapore Literature, and provide examples of the images of the Japanese Occupation Period from 1942 to 1945. *The Singapore Grip* by J. G. Farrell, *Is There an Orchid in Singapore?* by Sasaki Joh, and other Singaporean stories by Lim Thean Soo, Walter Woon, Gopal Baratham, and Goh Sin Tub are examined in this paper.

The unique phenomenon in Singaporean literary society is the boom of ghost stories. The series of ghost stories edited by Russell Lee have been the best sellers for years in Singapore. One of the frequent subjects of such stories is the fall of Singapore by the Japanese military and people's deaths involved. The Japanese images seem to have been stereotyped by these literary works. Singapore Literature is expected to develop further when it grows out of such tendencies.

1. はじめに

シンガポールは 2016 年には日本との外交関係樹立 50 周年を祝い、現在も友好的な関係を保っている。村上龍(1952 -)の『ラッフルズホテル』(1989)で描かれるシンガポールは、日本の富裕層をひきつける贅沢な異空間として描かれる。「この写真がサマセット・モームです・・・これがヘルマン・ヘッセ、これがキプリング、そしてこれがジョセフ・コンラッドです」¹とガイドは誇らしげに説明する。作家たちがこのホテルについて記事を書き、つられて多くの有名人がここに泊まり、それがさらに評判を呼ぶことになった。この小説の中でシンガポールは、別荘地のような島として描写されている。

だが、シンガポールはもともとは素朴な熱帯の漁村であった。1819 年にトーマス・ラッフルズ(Sir Thomas Raffles 1781-1826)がここを東インド会社の交易所とし、1826 年に英国の海峡植民地とした。1869 年にはスエズ運河が開通し、貿易の中継地としてこの地の重要性が増した。1873 年には岩倉使節団もここを訪れている。

イザベラ・バード(Isabella Bird, 1831-1904)がシンガポールを訪れたのは 1879 年のことである。バードはヴィクトリア朝の女性旅行者としてよく知られている。彼女をまず圧倒したのは、シンガポールの色彩だった。“overpowering greenery, a kaleidoscopic arrangement of colours”²(圧倒的な緑、色彩の万華鏡のような配列)と彼女は驚いている。その 1 年前の 1878 年にバードは日本を訪れているのだが、青みがかった灰色の空の下、青白い海に青白い舟を見て“there were no startling surprises either of colour or form.”³(色も形も驚くようなものはなにもなかった)と書いている。なんと対照的であろう。

ラッフルズホテルができたのは 1887 年だ。Sarkies brothers が旅行客の増加をあてこんで建設したホテルである。イギリスの船舶会社 P&O (Peninsular and Oriental Steam Navigation Company) や日本郵船を使って、外国客が次々と押し寄せた。

やがてゴム産業の隆盛がやってくる。1906 年にシンガポールのデコニン島を租借し、ここにゴム園を開いたのが日本人ゴム産業参入の始まりだったという。⁴アメリカの自動車産業の発展に従ってタイヤの材料であるゴムの値は上がり続け、巨額投資の対象となった。特に 1910 年から 20 年までのゴム人気はうなぎのぼりだった。

そのころには日本人の売春婦たちが客を取っていた。金子光晴(1895 - 1975)の『マレー蘭印紀行』(1940)によると、「彼女達を『娘子軍』と称して先頭に立て、瀬ぶみをさせてそのあとから、男達が乗込んで商利の足がかりを作る。従ってシンガポールの日本の領事館も、女たちやそれにかまるとごたごたが多いので、馬來人たちは永らく、娘子軍あねさまの総取締のように考えていた」⁵ということだ。しかしこうした「醜業」は、国の面子をつぶすものとして嫌われ、1920 年には廃止されることになる。

第一次大戦終了後の世界的不況により、ゴム相場は暴落した。それでも英国の植民地としてシンガポールの貿易は衰えたわけではなかった。このころの英国人と現地の人々との

関わりは、サマセット・モーム (Somerset Maugham 1874-1965) やジョゼフ・コンラッド (Joseph Conrad, 1857-1924) によって描かれている。

1942 年には日本軍が侵攻し、英国の手からシンガポールを奪った。日本によってシンガポールは「昭南島」と名付けられ、かのラッフルズホテルも「昭南ホテル」と改称された。従軍作家としてこの土地に来て、現地の英字新聞の編集長を務めた井伏鱒二や、現地の小学校で日本語を教えた神保光太郎の作品から、当時の様子を知ることができる。

1945 年、日本の敗戦によってシンガポールは再び英国の手に渡る。日本軍占領時には書けなかったさまざまな経験を、このころから現地の作家たちが書き始めた。1963 年にはイギリスの干渉から離れてマレーシア連邦の一部となる。1965 年マレーシア連邦からも離れ、都市国家として独立する。

シンガポールを舞台にした文学作品からは、この国の複雑な歴史や文化を感じ取ることができる。そうした作品群の中から、日本と日本人のイメージを検証していきたい。

2. モームの描く日本人

2-1 「東洋航路」

サマセット・モームは『人間の絆』(*Of Human Bondage*, 1915) や『月と六ペンス』(*The Moon and Sixpence*, 1919) などの小説でよく知られている。モームは生涯にわたって世界各地に旅行しているが、1920 年代にはマレー半島やインドシナ半島を訪れ、この地の人間模様を短編小説に描いた。

『カジュアリーナ・トリー』(*The Casuarina Tree*) は 1926 年に出版された短編集である。カジュアリーナ・トリーというマレーシア全域に自然生育する常緑樹をタイトルとしたこの短編集は、南洋の開放的な空の下での人間のおぞましい生きざまを描いている。そのうちの一篇「東洋航路」(“P & O”) は、南洋を航海する汽船が舞台だ。マレー半島と東洋一帯に航路を持つこのイギリスの汽船には、さまざまな背景を持つイギリス人が乗船してくる。

ミセス・ハムリンはロンドンに帰る途中、シンガポールで下船し、街の様子を見る。多くの民族が交わる街だ。マレー人、中国人、黒い肌のタミル人、つやつやと裕福そうなベンガル人、そして“the sly and obsequious Japanese seem busy with pressing and secret affairs”⁶ (ずるがしこく、へつらい上手な日本人はなにか急な内緒の用で忙しげにしている)、と描写が続く。1920 年代ならばゴムの好景気が一段落し、次の商機をうかがう日本人の姿が見られたかもしれない。このころは排日運動・日貨排斥が盛んになりつつあり、シンガポールでの商売は日本人にとって難しくなっていた。

篠崎護によれば対日ボイコットがおこったのは第一次大戦中であつた。その後もボイコットは断続的に続き、「在留邦人としては、ゴム安、戦後の不況とトリプル・パンチを

食い苦境のドン底につき落された」が、「日本に引き揚げることの出来ない地場商店は齒を食いしばって堪えていった」⁷という。モームの描いたような日本人がせわしく歩いていても不思議ではない。

2-2 「ニール・マックアダム」

モームにはもう一冊、『アー・キン』(*The Ah King*) という 1933 年に刊行された短編集がある。阿慶(アー・キン)という名の友人と旅行したことを記念して、彼の名前をタイトルにつけたと「序文」に記されている。このうちの一篇「ニール・マックアダム」(“Neil MacAdam”)は、新任の博物館員としてシンガポールに赴任したニール・マックアダムが主人公だ。

ニールはコンラッドを愛読しており、これほど南洋の雰囲気をも正しく伝える描写力を持っている作家はいないと語る。⁸ 実際、当時南洋を訪れるイギリス人がまず手にしたがったものはコンラッドの作品であった。しかしニールの上司の妻ダーリアは、コンラッドを口先だけのいかさま師だとののしる。そしてニールはこの後、コンラッドの描かなかった残酷な南洋の生の姿を見せつけられることになる。

シンガポールに到着したニールを最初に案内したのはブレドン船長である。彼はニールを、社会見学と称してフランス人、イタリア人、アメリカ人、中国人の女たちのいる娼館に連れ出す。ニールが興味を示さないで、最後に日本人娼館に連れていく。やがて四人の日本人娘が部屋にやって来る。

They were sweet in their kimonos, with their shining black hair artfully dressed; they were small and plump, with round faces and laughing eyes. They bowed low as they came in and with good manners murmured polite greetings. Their speech sounded like the twittering of birds.⁹

キモノ姿の日本人娘たちは、かわいらしく、きちんと挨拶し、小鳥のようにさえずる。イギリス文学作品にこのように日本人娼婦が扱われていることは、あまり知られていない。『南洋の五十年』によると、シンガポールの花街が全盛をきわめたのは日露戦争直後、すなわち 1905 年ごろであったという。

何と云つても花街の全盛は日露戦争直後であつたらう、新嘉坡のハイナム、マレー、マラバの三街とバンダを加へて七百人に近い娘が店張着の晴手を競ひ、軒燈輝やくカキリマルバンコを持出し黄色い声を振り絞つて盛んに客を呼び込んでゐたものだ。¹⁰

ところがその後すぐに日本政府は、シンガポールだけで七百人もいた日本人娼婦たちを、

「醜業婦」として排斥するようになる。1920年に日本人娼館は—少なくとも表向きには—すべて撤廃された。この小説の舞台は、撤廃令が出される以前のシンガポールである。

3. 日本軍の侵攻

3-1 『シンガポール・グリップ』

J. G. ファレル (J. G. Farrell, 1935-1979) の『シンガポール・グリップ』(*The Singapore Grip*, 1978) は、『帝国三部作』(*Empire Trilogy*)の一作として上梓された。『トラブル』(*Troubles*, 1970)、『クリシュナプール包囲攻撃』(*The Siege of Krishnapur*, 1973)に続く第三作である。『トラブル』ではアイルランド独立運動を、『クリシュナプール包囲攻撃』ではインド暴動事件を扱い、『シンガポール・グリップ』では日本軍による攻略直前のシンガポールを描いた。いずれもイギリスの植民地統治とその崩壊がテーマとなっている。

作者は、シンガポール上流社会で優雅に生活するイギリス大手企業 Blackett and Webb の経営者やその取り巻きと、虎視眈々と侵略を狙う日本軍人たちの様子を同時並行的に描く。戦いは砲火や飛弾の描写ではなく、キクチ一等兵、マツシタ軍曹らの心理描写や細かな行動によって伝えられる。ジャングルの中で蛇を裂き、ヒルに食われながら進軍した日本軍の様子が、まるで間近で見ているかのように描かれる。

Matsushita took the sabre and with a swift, clean swipe beheaded one snake after another. Then he swiftly gathered up the writhing bodies by the tails, stood there for a moment with a fistful of lashing bodies spraying blood over his thighs as if deep in thought, and finally went to sit against the hole of a tree, prising them open one after another with two stubby fingers to search out the liver and pop it in his mouth. An enormous leech, Kikuchi could not help noticing, had batted on the Lieutenant's private parts.¹¹

これらの情報を著者は一次資料から得たと序文に書いている。フィクションでありながら参考文献を末尾に示しているのはそのためだ。

イギリス軍の敗北によってこの戦いは終わりを告げる。Blackett and Webb 創立者の息子で、ヨーロッパで教育を受けたマシューは、さまざまな場所で「シンガポール・グリップ」に気をつけるようにと呼びかけられて当惑する。「シンガポール・グリップ」とは何なのか。マシューは最初、熱帯特有の病気的一种だと思った。次にになにかの秘密結社のことではないかと勘ぐる。ついには売春婦たちが閨房で使う一種の性的テクニクであろうと推測する。やがて彼は、それが「異国に押しつけられた西洋の価値基準」のことだと理解する。

作品の最後、日本軍もイギリス軍も撤退したシンガポールが舞台である。1976年12月10日の『タイムス』誌の記事が紹介される。現地のゴム園などのプランテーションで、

労働者は一日一ドルしか支払われていない、という記事である。搾取するのはもはや日本軍でもなく、イギリス軍でもない。現地のエリート経営陣だ。歴史は変わり、上に立つ者は交代する。しかし、搾取する者と搾取される者は存在し続ける。この現実こそがシンガポール・グリップなのだと読者は気づかされる。

3-2 『昭南島に蘭ありや』

佐々木譲の『昭南島に蘭ありや』は 1995 年に出版された。この小説の主人公は台湾生まれの青年リオンである。シンガポールで日本人貿易商桜井に雇われていたが、1941 年、戦争により引き揚げ命令が出たため、国に帰らなければならなくなった。桜井はリオンを日本人として扱っている。シンガポールの統治者イギリス人は、自国民以外を対等に扱っていないとして、彼はこのように語りかける。「この島で、イギリス人はこんなふうにしてお前と酒を飲んだ事があるか？ 祝いごとの場に、招んでくれるか？ 一緒に飯を食ったことはあるか？」¹²

イギリスと日本が戦争に突入したため、桜井はチャンギ刑務所に収容される。リオンは中国人だとして拘束をまぬがれ、今度は抗日義勇軍に勧誘されることになる。

ついに日本軍がシンガポールを陥落させると、悪名高い華僑粛清が行われる。1942 年 2 月 19 日、シンガポール在住の 18 歳から 50 歳の華僑は 21 日正午までに所定の場所に集合せよ、との山下奉文軍司令官からの命令が布告される。21 日から 23 日にかけて、憲兵隊による粛清が行われた。抗日分子のみならず、抗日分子らしいと見なされた数千人の華僑が、機関銃による一斉掃射によって殺害されたのである。

リオンは刑務所から解放された桜井にすんでのところで助けられる。日本軍とともに軍属として台湾人が入ってくると、彼らは中国人の怨嗟の的となる。そこにインド独立運動の動きも混じる。

日本軍の粛清から生き延びたリオンは、今度は中国人から命をねらわれる。それを免れるために、彼は東条英機暗殺に手を染めようとするが、失敗する。すると今度は逆に暗殺を阻止した英雄の扱いを日本人から受ける。中国人たちの殺意の中、リオンは愛人と逃避する。彼に向って中国人の男は、きみは結局何者なのかと問う。この質問に彼は答えることができない。そして読者もまた沈黙するしかないのだ。

めまぐるしく変わる政情の中で、国籍はそのたびに価値を変える。シンガポールは、宗主国に支配される植民地という単純な関係で成り立つ社会ではなく、多民族の欲望と思惑が交差する流動的な社会を築いてきた。モームはシンガポールを何百という人種の交流点と称し、雑多な人種の集会所と書いた。めくるめく南洋の色彩の中で、人もまたその色彩のひとつとして描かれた。しかし、モームやコンラッドの描かなかった人種同士の命をかけた衝突が、この日本統治時期には現実として見られたのである。

4. 現地の人々の視点

4-1 日本占領期の現地生活

では、現地の人間はこの時期をどのように描いたのだろうか。リム・ティアンスー (Lim Thean Soo 1924-1991) は、中国系シンガポール作家である。彼は *The Siege of Singapore* (1989) で、1942 年の日本軍の侵攻を描いた。シンガポール陥落は 1942 年 2 月 15 日であったが、この日がちょうど中国人にとっての旧正月の祝いの日であったということは、忘れられがちである。この日、彼らが聞いたのは縁起のいい爆竹の音ではなく、恐ろしい爆弾の炸裂音であった。恐怖と悲哀の中で、彼らはこう思う。“Somehow, somehow, a man had to live.”¹³ 人は、なんとしても生きていかねばならないのだ。爆撃された店や家に忍び込み、金目のものを持ち出す者もいた。著者は冷静な筆致でこれらを描く。イギリス軍の白旗がはためき、サイレンが鳴る。この時、彼らは叫んだだろうか、泣いたのだろうか。実際は、“The silence deepened further.”¹⁴ つまり、暗い沈黙が支配したのである。読者はこの戦いの舞台となった場所の生々しい現実息を飲む。

ウォルター・ウーン (Walter Woon 1956-) の *The Devil's Circle* (2011) は、日本軍政下の住民の心理を描く。

They had been so good at hiding their true feelings that no one would ever have suspected their deep and abiding passion for the British and their abhorrence of all things Japanese.¹⁵

1942 年以降、日本の支配下にあった現地の人々は、表面的には日本人に従い、反乱をおこすこともなかったが、一度も心を許したことはなかったのだ。彼らは生きるために、やむを得ず日本人と関わっていた。こうした心理は、日本人には思い至らぬものであった。

井伏鱒二 (1898 - 1993) がシンガポールに来たのは 1941 年のことである。この年 11 月 15 日に陸軍徴用令書を受け取った井伏は、22 日には報道班員としてマレー・シンガポール方面への従軍を命じられる。井伏のほか、北町一郎 (会田毅)、小栗虫太郎、海音寺潮五郎、北川冬彦、堺誠一郎、里村欣三、神保光太郎、月原澄一郎、寺崎浩、中島健蔵、中村地平らも徴用されている。1942 年 2 月 15 日にシンガポールが陥落すると、翌 16 日に井伏はシンガポール市内に入った。彼はこの日から 1942 年 11 月 22 日に徴用解除となるまで、約 1 年間のシンガポール生活を送ることになる。

このころに書かれた小説『花の町』の描写は淡々としており、そこはかとなくユーモアが漂っている。作中、昭南日本学園で熱心に日本語を教えている「神田幸太郎」は、神保光太郎がモデルである。町なかで「ボーイス・スクール」と書いた看板を見つけると、神田校長は人力車を止めさせ、わざわざ降りて遺憾の意を示す。「私はいふ。昨日の私のさういふ説明をあなたは少しも解さなかつたものと見える」。¹⁶ ボーイス・スクールとは、

正しくはボーイズ・スクールであるべきだが、実はこの学校は女子校なのである。

こうした少しユーモラスな、なんでもない日常は、しかし、現地の人々にとってはけっしてなんでもないわけではなかった。彼らは生きていくために、支配する者の言いなりになっていたにすぎないのだ。

“The Devil’s Circle”の主人公チャンは、日本の憲兵が、反日の容疑で捕らえた者の口を割らせることができなかった場合、どうなるのかと問う。“Killed? Of course not. ... He would be dishonoured by his failure. If that failure were bad enough, he would have committed seppuku.”¹⁷ 憲兵は殺されることはない。だが、名誉と体面が汚される。それを挽回するためには切腹しなければならないこともある。チャンは戦争というものの正体を見た気がする。支配する者をおごらせ、される者を卑屈にする。拷問される者を地獄の苦しみにあわせ、する者にも別の地獄を見せるのだ。

4-2 拷問の余韻

ゴーパル・バラタム (Gopal Baratham 1935-2002) の短編小説 “The Interview”(1981) にも、日本軍による拷問が描かれている。テレビ局に勤める主人公は、英国のメイスン陸軍准将にインタビューする機会を与えられる。主人公の父親によればメイスンはその勇氣と誇りによって、日本軍の言語に絶する残虐行為に打ち勝った英雄なのだ。だが彼は拷問者である日本人について、むしろ親し気に語る。“We were both involved in something of greater intensity than most people ever experience. I suppose lovers at the height of their passion, might feel the same.”¹⁸ 戸惑う主人公に対し、メイスンは説明を続ける。とうとう処刑の命令が下ったときのことだ。拷問者は、彼の痛んだ指にそっと触れる。“He shook my hand — very gently, mind you, so as not to hurt my damaged fingers — and said it had been an honour to meet such a brave man.”¹⁹ ここに読者はかすかに拷問の余韻を感じる。メイスンは結局処刑を免れる。終戦後、逆に日本人の方が戦犯として処刑されることになる。その処刑に立ち会ってほしいという手紙をメイスンは受け取り、望み通り立ち会ったという。インタビュアーはすっかり混乱し、この情報を処理しきれずにいる。善人と悪人、拷問を与える者と受ける者、戦勝国と戦敗国。それらがけっして白黒で塗り分けられるものでないことを、この短編小説は主人公のいらだちと混乱のあいまから提示してみせる。

5. 怪談による歴史教育

5-1 ゴー・シンタブと日本人

ゴー・シンタブ (Goh Sin Tub 1927-2004) は、*Walk like a Dragon/ Short Stories* (2004) に収められた “The Sook Ching” で、日本軍による華僑粛清を描いた。14歳の少年はからくも生き延びたが、このように語っている。“For myself, Sook Ching was the purge of my childhood

innocence.”²⁰ この少年は、命こそ助かったが、かけがえのない少年時代の「無垢」を「粛清」されたのだ。この経験は彼にとっての残酷なイニシエーションとなった。だが、呉はまた、その後の日本人との交流をも描いている。

The Angel of Changi and Other Short Stories (2005) に収められた“The Gakko”を見てみよう。これは日本軍が支配したシンガポールにおける昭南軍政監部国語学校の描写である。彼らは日本語を教えられると同時に、大和魂や日本精神を教え込まれる。成績のよかった呉青年は、ヒロ先生の助手を務めるようになる。

ヒロ先生は呉にシンガポール侵攻の様子を伝える。彼は戦死した友のことを語り、このような歌を歌って涙ぐむ。“Ichiban nori o yarunda to/Rikinde shinda senyu no/Ikotsu o daite ima hairu/Singaporu no machi no asa...”²¹ この歌は日本で広く歌われた軍歌のひとつ「戦友の遺骨を抱いて」である。勝者にとっても戦争はやるせないものだといふ呉は知る。

しかし、彼はまた、征服された者が見た地獄について語らずにいられない。抗日分子と決めつけられてトラックで運ばれ、二度と戻らなかった者たちの話だ。“Goh had no song with which to end his story. His heroes remained unsung.”²² 彼らは無駄に死に、その死を悼む歌さえない。ヒロ先生はこの現実の前に黙り込むしかないのだ。ここには敵同士から先生と生徒になった者たちが、手探りではあるが、理解しあおうとする姿が描かれている。

呉は、ほかに“The Campus Spirit at Bukit Timah”という短編小説を書いている。タダシという若い日本人が、大学の特別休暇を得てシンガポールに行く。自身のコンピュータに論文を打ち込み、疲れて古い日本の軍歌を歌っていると、突然スクリーンが真っ白になる。コンピュータの中にいたのは、日本軍のためにシンガポールで殺戮を続けた彼の曾祖父の幽霊であった。君が来るのを待っていた、と彼は言う。“As a token of love, as symbolic act to finish my incomplete harakiri, help me destroy these chains that have imprisoned my spirit to the world for these long years.”²³ シンガポールで間違った行為を犯しながらハラキリできなかった自分のために、コンピュータを壊してくれ、と幽霊は懇願する。タダシは深くおじぎをしてコンピュータを高く掲げ、床に打ち付ける。

この小説は怪談の類であるが、現代のハイテク機器を介したいわば Hi-tech Haunting と呼べる新しい怪談だ。だが、題材は古くから続く日本軍ものである。1942 年から 1945 年の 3 年にわたる日本統治時代の記憶は、現代の文学作品にも脈々と流れているのだ。

5-2 ゴースト・ストーリー

シンガポールのベストセラーといえば、キャサリン・リム (Catherine Lim 1942-) の *Little Ironies: Stories of Singapore* (1978) や、ボニー・ヒックス (Bonny Hicks 1968-1997) の *Excuse Me, Are You a Model?* (1990) がある。しかし、純然たる文学作品とはいえない作品があるが、実はこの国の継続的ベストセラーなのだ。それは *The Almost Complete Collection of True Singapore Ghost Stories* というシリーズ本で、「本当にあった怖い話」とでも訳せる

ような、安っぽい実話集である。

Russell Lee という覆面編集者がこのシリーズを監修しており、だれでも投稿できる。Book 1 が 1989 年に出版されたとき、大きな反響があり、それ以来シリーズ化された。その Book 3(1994) には “The Japanese Occupation” という章が設けられており、日本軍政期の怪談に特化している。

そのうちの一言 “The Dead Won’t be Buried” は 71 歳の元捕虜の投稿だ。1945 年に日本軍が撤退したあとも、チャンギ刑務所からはうめき声が聞こえ、囚人たちの霊が見られ、チャンギ・ビーチでも日本人の声や銃声が聞こえたという。 “Even if the younger generation no longer remembers, we the old folks have indelible recollections of extreme horror, memories which we’ll carry to the grave.”²⁴ という言葉からは、こうした怪談がシンガポールの歴史教育の一端を担っていることが感じられる。

Book 6 (1995) にも “Japanese War Stories” と題する章がある。ラッセル・リーによる序文には、 “I hope this collection will help to relieve some of the pain as well as put to rest many a tortured ghost.”²⁵ と書かれており、日本軍統治時代に命を落とした人たちの魂をなぐさめるために、このような話は伝え続けられるべき、というスタンスが見える。

たとえば “Massacre Screams” は、66 歳の退職者からの投稿だ。Siglap で戦後復興の建築作業が始まる前、人々の悲鳴とマシンガンの音が聞こえたという住民や、手をロープで縛られて一列に並ばされ、殺された被害者の亡霊を見たという住民がいた、というものだ。これに対してリーは Siglap が「出る」場所である書き、ほかに Choa Chu Kang, Punggol, Changi beach でも虐殺があったと解説している。

“Old Soldiers” は 37 歳のタクシー運転手からの投稿だ。日本軍が英国軍やインド軍と激しい戦いをを行った the Seletar River 周辺で、イギリス軍の軍服を着て行進する幽霊の姿を見たというものだ。Seletar も「出る」、とリーは書く。

このシリーズ本は、多くの読者を獲得して現在も刊行を続けている。だれでも投稿でき、長さも内容も自由である。投稿者は希望すれば名前を記載してもらえ、選ばれれば賞金や賞品も与えられる。投稿者は編集者にその話を裏付けるコメントをしてもらい、もっと書くように奨励される。こうして毎年のように語り継がれる怪談は、1942 年から 1945 年という時期がどういう年代であったかを思い出させ、シグラップやチャンギといった地名が何に関連づけられた土地であるかを再認識させる。こうしてシンガポールのナショナル・スピリットは形成されていくのだ。文学作品がその国の特徴や成り立ちを伝える役目を果たすというならば、このシリーズはたしかにシンガポールのなんたるかを如実に伝えている。

6. おわりに

2018 年に上映された“Crazy Rich!”という映画は、全米で公開初週から 3 週連続で興行成績 1 位を獲得した。シンボールの大富豪が平凡なアメリカ人と結婚しようとしてさまざまな嫌がらせを受けるが最後は結ばれる、というハリウッド映画のアジア版ともいえる映画だ。ヴェルサーチやディオールなどのハイブランドがずらりと並び、リッチでファッショナブルな生活、華やかなパーティーシーンが目をひく。だが、ケヴィン・クワン (Kevin Kwan 1973-) の原作 *Crazy Rich Asians* (2013) には、映画では省略されたいくつかの日本への言及がある。それは、やはりこの国を侵略した日本軍への言及である。

“They can give this resort some fancy new name, but I know for a fact the island used to be called Pulau Hantu — Ghost Island. It was one of the outlying islands where the Japanese soldiers took all the young able-bodied Chinese men and had them shot during World War II. This island is haunted with ghosts of the war dead.”²⁶

美しいリゾート・アイランドもかつては日本軍の蛮行に血塗られており、幽霊が出るというのだ。

2018 年に制作され、日本では 2019 年に公開された映画「家族のレシピ」(英語タイトルは“Ramen-The”)もシンガポールが舞台だ。バクテというシンガポールの郷土料理にひかれた日本人男性が、作り方を学ぼうとする。幼いころに亡くなった彼の母はシンガポール人であった。最初は祖母に拒絶されるが、最後にはシンガポールのバクテと日本のラーメンとの融合に成功する、というストーリーである。ここでも、高齢者の間にくすぶる日本人への悪感情が描かれている。主人公は今まで知らなかった歴史を博物館で学んでいく。実際に、シンガポールの博物館はしばしば日本統治期を特集し、旧フォード・ファクトリーは日本軍政期の特別館となっている。ラッフルズホテルの向かいには、日本占領時期死難人民記念碑が静かに立っている。日本軍統治期に犠牲になった多くの人々の魂をなぐさめるために 1967 年に建築されたものである。

日本人イメージはこうして受け継がれていく。だが文学作品は、このような確立された日本人イメージを補強する手段ではないだろう。むしろそこから抜け落ちていく要素に目を留めるところから再出発すべきものではないだろうか。

ゴパール・バラタムの短編小説“Japanese Girl”(1995)は、父親を日本軍に殺された恨みを抱く男性が主人公だ。日本軍、憲兵隊、拷問、虐殺 — 幾度となく繰り返されたテーマがここでも描かれる。主人公は恨みを忘れず、日本製品を使うことも身につけることも拒否する。しかしある日、彼は日本人女性に恋をする。新しい展開である。ただ、この女性の描かれ方が、とりもおさずステレオタイプなのである。彼女は“sado”(茶道)と“kadou”

(華道) と “koto” (琴) と “hikaeme” (控え目) を主人公に教えるのだ。²⁷ バラタムは短編小説の名手であり、特にエンディングの妙は “The Interview” でも “Japanese Girl” でも光っている。だからこそ、教科書どおりともいえる日本人の描写は、やや精彩を欠くと言わざるを得ない。

シンガポールと日本は外交関係を樹立して 50 年になる。映画「家族のレシピ」は 50 周年を記念して制作されたものであり、今後も両国は友好的な関係を続けていくだろう。2018 年 4 月時点で、シンガポール日本商工会議所 (JCCI) に加盟する会員数は 826 に達し、大手小売店の新規出店や店舗拡大が続いているという。²⁸ シンガポール在住日本人が増えるにしたがって、おなじみの日本人イメージにも変化が訪れるかもしれない。今後、ステレオタイプを脱した新しい視点で日本人が描かれるようになるだろう。政治や経済ばかりでなく文学においても、日本・シンガポール間により豊かな実りがもたらされることを願う。

注

- 1 村上龍『ラッフルズホテル』(集英社文庫、1992 年)、p.115。初出は 1989 年。
- 2 Isabella Bird *The Golden Chersonese and the Way Thither* (Bristol: Ganesha Publishing, 1997), p. 109. 初出は 1883 年。
- 3 Isabella Bird *Unbeaten Tracks in Japan* (Bristol: Ganesha Publishing, 1997), p.12. 初出は 1880 年。
- 4 商工省商務局貿易課編『南洋ニ於ケル法人ノ護謄投資事業』(商工省商務局貿易課、1928 年)、p. 4。
- 5 金子光晴「マレー蘭印紀行」『金子光晴全集 第 6 巻』(中央公論社、1976 年)、p.67。初出は 1940 年。
- 6 Somerset Maugham “P & O” in *Far Eastern Tales* (London: Vintage Books, 2000), p.44.
- 7 篠崎護「南洋進出の百年 — シンガポール邦人略史 —」『南十字星 記念復刻版 シンガポール日本人社会の歩み』(シンガポール日本人会、1978 年)、p.52.
- 8 コンラッドを早くに知った夏目漱石も「小説に用ふる天然」『国民新聞』(1909 年 1 月 12 日)で、彼の自然描写、特に海洋の描写の秀逸さについて書いている。
- 9 Somerset Maugham “Neil MacAdam” in *Far Eastern Tales*, p.187.
- 10 南洋及日本人社編『シンガポールを中心に 同胞活躍 南洋の五十年』(南洋及日本人社、1937 年)、p. 160。
- 11 J. G. Farrell *The Singapore Grip* (London: Weidenfeld & Nicolson, 1978), pp. 438-39. ジャングルにひそむ毒蛇や大ヒルの描写は、日本人の書いたシンガポール戦の著作からヒントを得た。ファレルが参考文献として記しているのは、Tsuji, M., *Singapore, The Japanese Version* (London 1962)。原著は辻政信『シンガポール — 運命の転機 —』(東西南北社、1952 年)。
- 12 佐々木譲『昭南島に蘭ありや 上』(中公文庫、2001 年)、p.30。初出は 1995 年。
- 13 Lim Thean Soo “The Siege of Singapore” *Written Country*, ed. Gwee Li Sui (Singapore: Landmark Books, 2016), p.23.
- 14 Ibid., p. 24. ティアンソーにはまた、詩 “Lallang” (*Poems 1951-1953*) がある。ララングとは Lalang と綴られることもある植物の名前である。主にマレーシアに生育する背の高い雑草をさす。この詩の中で、彼はこう歌う。“Monster herds, human tribes:/Chinese fleets, Malay drums;/European cannons, Samurai swords!—Did not they appear only yesterday?” さまざまな民族が住みついたこの地に、日本の軍人も来た。戦いや争いばかりが続いた。けれども自分は、この地に自生するララングのように力強く生き延び、けっして自分をみじめにはさせない、とこの詩人は歌った。
- 15 Walter Woon “The Devil’s Circle” *Written Country*, p. 44.

- 16 井伏鱒二「花の町」『井伏鱒二全集 第 10 巻』筑摩書房、1997 年、p.42。井伏はシンガポールで英字新聞『昭南タイムス』の編集責任者を命じられる。性分に合わぬ仕事を 3 か月ほど続けたあと辞して、『東京日日新聞』と『大阪毎日新聞』に小説を連載する。これが『花の町』というタイトルの単行本として刊行されたのは 1943 年 12 月であった。
- 17 Walter Woon “The Devil’s Circle” *Written Country*; p.51.
- 18 Gopal Baratham “The Interview” *Collected Short Stories* (Singapore: Marshall Cavendish, 2001), p. 81.
- 19 *Ibid.*, p.85.
- 20 Goh Sin Tub, “The Sook Ching” *Written Country*; p. 29.
- 21 Goh Sin Tub “The Gakko” *Written Country*; p. 39. 「一番のりをやるんだと、力んで死んだ戦友の、遺骨を抱いて今入る、シンガポールの街の朝」。1943 年に達原実作詞、松井孝造作曲で発表された。
- 22 *Ibid.*, p. 40.
- 23 Goh Sin Tub “The Campus Spirit at Bukit Timah” *The Campus Spirit and Other Stories* (Singapore: Raffles, 1994), p. 63.
- 24 Russell Lee, ed. *The Almost Complete Collection of True Singapore Ghost Stories Book 3* (Singapore: Angsana Books, 1994), p. 165.
- 25 Russell Lee, ed. *The Almost Complete Collection of True Singapore Ghost Stories Book 6* (Singapore: Angsana Books, 1995), p. 46.
- 26 Kevin Kwan *Crazy Rich Asians* (N. Y.: Anchor Books, 2013), pp. 402-403.
- 27 Gopal Baratham “Japanese Girl” in *Collected Short Stories*, p. 290.
- 28 日本貿易振興機構 (JETRO) 『世界貿易投資報告 2018 年版』(JETRO、2018 年)、p. 6。

参考文献

- Baratham, Gopal. *Collected Short Stories*. Singapore: Marshall Cavendish, 2001.
- Bird, Isabella. *The Golden Chersonese and the Way Thither*. Bristol: Ganesha Publishing, 1997.
- *Unbeaten Tracks in Japan*. Bristol: Ganesha Publishing, 1997.
- Farrell, J. G. *The Singapore Grip*. London: Weidenfeld & Nicolson, 1978.
- Goh, Sin Tub. *The Campus Spirit and Other Stories*. Singapore: Raffles, 1994.
- Kwan, Kevin. *Crazy Rich Asians*. N.Y.: Anchor Books, 2013.
- Lee, Russell, ed. *The Almost Complete Collection of True Singapore Ghost Stories Book 3*. Singapore: Angsana Books, 1994.
- *The Almost Complete Collection of True Singapore Ghost Stories Book 6*. Singapore: Angsana Books, 1994.
- Li Sui, Gwee, ed. *Written Country*. Singapore: Landmark Books, 2016.
- Maugham, Somerset. *Far Eastern Tales*. London: Vintage Books, 2000.
- Poon, Angelia, et al., ed. *Writing Singapore*. Singapore: NUS Press, 2009.
- 井伏鱒二『井伏鱒二全集 第 10 巻』筑摩書房、1997 年。
- 金子光晴『金子光晴全集 第 6 巻』中央公論社、1976 年。
- 佐々木譲『昭南島に蘭ありや 上・下』中公文庫、2001 年。
- 商工省商務局貿易課編『南洋ニ於ケル法人ノ護謄投資事業』商工省商務局貿易課、1928 年。
- シンガポール日本人会編『南十字星 記念復刻版 シンガポール日本人社会の歩み』シンガポール日本人会、1978 年。
- 南洋及日本人社編『シンガポールを中心に 同胞活躍 南洋の五十年』南洋及日本人社、1937 年。
- 日本貿易振興機構 (JETRO) 『世界貿易投資報告 2018 年版』JETRO、2018 年。
- 村上龍『ラッフルズホテル』集英社文庫、1992 年。

